様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２３ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１３１９３

研究課題名（和文）奄美北部諸方言における疑問文の総合的記述

研究課題名（英文）A Comprehensive Description of Interrogative Sentences in the Northern Amami Dialects

研究代表者
白田　理人（Shirata, Rihito）

広島大学・人間社会科学研究科（教）・准教授

研究者番号：６０７７３３０６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、奄美北部諸方言の疑問文に関する記述を行った。主な成果として、話し手の遂行しようとしている行為に文の命題が関わっているか否かによる疑問文末標識の相違、疑問の焦点の範囲や述語の品詞などによる疑問文埋め込み標識の相違、疑問文末のイントネーションと述語の韻律的特徴の相互作用、確認要求文に用いられる視覚動詞命令形由来の文末形式の特徴について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
奄美北部諸方言の疑問文についてはこれまで詳細な記述はなされてこなかった。本研究は、疑問文の担う言語行為がどのように形式的に区別されるか、日本語学において疑問文の下位に位置づけられてきた確認要求文にどのようなムードに由来する文末形式が用いられるうるか、といった点について、新たな知見を示しており、特に日琉諸語の他の地域変種の疑問文の研究を促進するものといえる。

研究成果の概要（英文）：This study provides a description of interrogative sentences in the northern dialects of Amami. The main findings include the differences in sentence-final markers depending on whether the proposition of the sentence is related to the action the speaker intends to perform, the variation in embedding markers based on the scope of the question focus or the part of speech of the predicate, the interaction between the sentence-final intonation and the prosodic features of the predicate, and the characteristics of sentence-final forms derived from imperative forms of visual verbs used in confirmation requests.

研究分野：言語学

キーワード：疑問文　琉球諸語　奄美語　文法記述　言語行為　埋め込み疑問文　プロソディー　確認要求

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

琉球諸語の疑問文については，主に包括的な文法記述の中で，疑問詞・疑問助詞・疑問文に用いられる述語の活用形のリスト・概略的なイントネーションが報告されてきたが，詳細な研究は僅少であった。

２．研究の目的

本研究の目的は，奄美北部諸方言を対象に，疑問文の形態統語的・意味的特徴・韻律的特徴について調査研究し，疑問文を総合的に記述することである。

３．研究の方法

データ収集方法として，当初，現地での対面調査のみを予定していたが，新型コロナウイルスの感染拡大により，オンライン調査への切り替えを行った。また，調査を自粛せざるを得なかった期間／対象地域があった。このため，分析対象とする地域／項目を限定し，これまでに収集した調査データの再検討による研究も行った。

分析の観点として，真偽疑問文疑問文と疑問詞疑問文の区別のほか，述語の品詞などの形態統語的特徴，モダリティ・言語行為に関わる詳細な意味的特徴や，疑問文のイントネーションと述語のアクセントとの相互作用に注目して研究を行った。

４．研究成果

喜界島方言・奄美大島方言を対象に，主に，話し手の行為遂行を表す疑問文，疑問文末のイントネーション，埋め込み疑問文，確認要求文に関する研究を行った。

４．１．話し手の行為遂行を表す疑問文

これまで，喜界島・奄美大島の諸方言において，日本語のショウカのように話し手が遂行しようとする行為に関わる疑問文の文末形式として，接辞-(yu)mï が用いられることが断片的に報告されていたものの，詳細な記述はなかった。

本研究では，喜界島小野津方言を対象に，接辞-(yu)mï（例(1)参照）とその他の疑問文末形式の機能を，(i)真偽疑問文か疑問詞疑問文か，(ii)話し手の行為遂行に関わるか否か，(iii)聞き手に答えを求めるか否かという三つの基準から整理し，-(yu)mï を，真偽疑問文であり，話し手の行為遂行に関わり，聞き手に答えを求める場合に用いる形式として特徴づけた（白田 2019）。

(1)　話し手の行為遂行に関わる疑問文（喜界島小野津方言，白田 2019: 107）

daa	ňimucoo	wa＝ŋa	muc-umï(＝ya)?	khyaamu	nen＝na?
2.SG.GEN	荷物.TOP	1.SG＝NOM	持つ-*YUMÏ*＝Q	何とも	ない.NPST＝YNQ

「お前の荷物は俺が持とうか？（持たなくても）大丈夫か？」

４．２．疑問文末のイントネーション

喜界島方言について，動詞に疑問文末助詞が後接した形式の韻律的特徴の記述はこれまでもなされてきたが，平叙文に用いる（同じ長さの）文末助詞が後続した場合との対照による疑問文の文末イントネーションの特徴の精査や，述語のアクセントと文末イントネーションの関わりについての分析はなされていなかった。

本研究では，喜界島北部の小野津方言と，喜界島南部の上嘉鉄方言を対象に，真偽疑問文末のイントネーションと，末尾上昇型の動詞のアクセント単位の疑問文末助詞への拡張現象の方言差について記述した（白田 2022a）。特筆すべき点として，小野津方言では，末尾上昇型の動詞に一拍の文末助詞が後続する際，動詞末尾が撥音となりアクセント単位が拡張しない助詞＝ɲa の場合と，動詞末尾が促音となりアクセント単位が拡張する助詞＝ka の場合で文末の高さが変わること（図 1 参照），及び，以上が疑問文だけの特徴ではなく，一拍助詞を用いた平叙文にも当てはまることが明らかとなった。一方，上嘉鉄方言では，疑問文末が高くなり，平叙文と対立しており（図 2 参照），これは，動詞のアクセント型，アクセント単位拡張の有無によらず成り立つことが分かった。

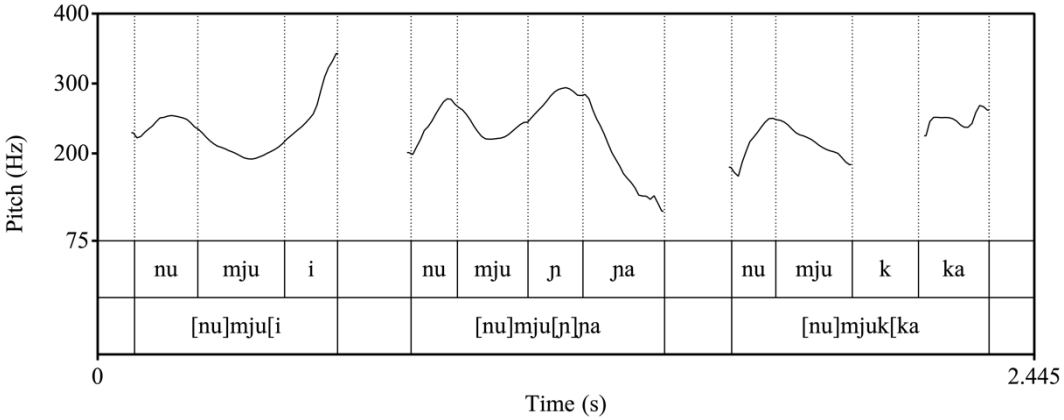

図 1：動詞非過去形「飲む」と疑問文末助詞＝ɲa/＝ka

（喜界島小野津方言，白田 2022a: 223）

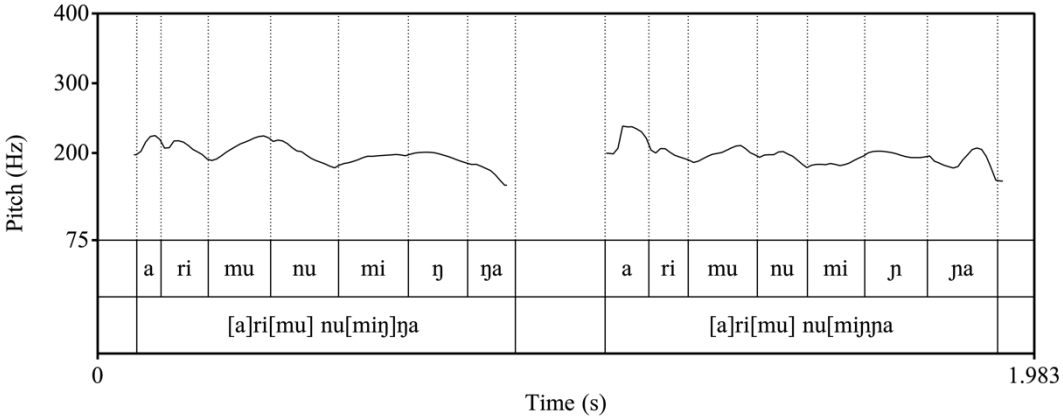

図 2：平叙文末助詞＝ŋa と疑問文末助詞＝ɲa の対照：「あれも｛飲むよ。／飲むか？｝」

（喜界島上嘉鉄方言，白田 2022a: 232）

４．３．埋め込み疑問文

琉球諸語のうち，北琉球語群においては，疑問文の埋め込みに際して，焦点助詞＝ga が現れ，述語が接辞-ra をとった構造が見られることが指摘されていたが，奄美大島方言についてはこれまで詳細な記述がなかった。

本研究では，奄美大島大和村今里方言を対象に埋め込み疑問文について調査研究を行い，その結果，(i)焦点助詞＝ga と推量接辞-ro を含む構造（例(2)a 参照）と，(ii)埋め込み疑問助詞＝garo を用いた構造（例(2)b 参照）の二種類の埋め込み構造が見られ，述語が疑問の焦点でなく，かつ，活用する場合（動詞／形容詞／コピュラの場合）にのみ，前者の埋め込み構造が用いられることを報告した（白田 2020）。

(2)　埋め込み疑問文（喜界島小野津方言，白田 2020: 154-155）

a.　ak’ira＝ya　it’ï＝ga　kuu-ro　wakaran.
アキラ＝TOP　いつ＝FOC　来る.NPST-INFR　分かる.NEG.NPST
「アキラはいつ来るか分からない。」

b.　wan＝na　y’aa＝ya　taru＝garo　wakaran.
1SG＝TOP　2SG＝TOP　誰＝EQ　分かる.NEG.NPST
「私はお前が誰か分からない。」

４．４．確認要求

本研究では，日本語学的研究の中で疑問文の下位に位置づけられる確認要求文の特徴についても扱った。特に，喜界島北部の小野津方言・志戸桶方言において，「…の（を）見ろ」に相当する，準体形式＋動詞「見る」の命令形（*-su mire）から発達した文末形式（小野津方言：接辞-sumï:／志戸桶方言：助詞＝miri，例(3)参照）が，当該の知識を聞き手が有していることの確認を要求する，知識確認の要求等に用いられることを報告した（白田 2022b）。

(3)　確認要求文（a：喜界島小野津方言／b：喜界島志戸桶方言，白田 2022b: 37-38）

a.　ama＝ɲi　ju:biNkjoku＝ŋa　a-sumï:.
あそこ＝与格　郵便局＝主格　ある.非過去-確認要求
huN＝ŋa　ni:＝nu　ja:＝ŋa　tʰanakasaNja:＝do:.
それ＝属格　傍＝属格　家＝主格　田中さん家＝文末助詞
「（指を指しながら）あそこに郵便局があるだろう？その傍の家が田中さんの家だよ。」

b.　ama＝ɲi　ju:biNkjoku＝ŋa　aN＝miri.
あそこ＝与格　郵便局＝主格　ある.非過去＝確認要求
uma:＝nu　suba:＝nu　ja:＝ŋa　tʰanakasaN＝nu　ja:　dʑa＝ŋa.
そこ＝属格　傍＝属格　家＝主格　田中さん＝属格　家　コピュラ.非過去＝文末助詞
「（指を指しながら）あそこに郵便局があるだろう？その傍の家が田中さんの家だよ。」

参照文献

白田理人（2019）「北琉球奄美喜界島小野津方言の疑問文末標識と言語行為―話し手の行為遂行に関する疑問文を中心に―」『日本言語学会第 159 回大会　予稿集』104-110.

白田理人（2020）「奄美大島今里方言の埋め込み疑問文について」『南島文化』42: 153-166.

白田理人（2022a）「北琉球奄美喜界島方言における動詞のアクセント単位の拡張と真偽疑問文末のプロソディー」窪薗晴夫・守本真帆（編）『プロソディー研究の新展開』214-235. 東京：開拓社.

白田理人（2022b）「北琉球奄美喜界島北部方言の確認要求表現―視覚動詞命令形由来の形式を中心に―」『西日本国語国文学』9: 44-30.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 白田理人	４．巻 9
２．論文標題 北琉球奄美喜界島北部方言の確認要求表現―視覚動詞命令形由来の形式を中心に―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 西日本国語国文学	６．最初と最後の頁 44-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 白田理人	４．巻 該当なし（書籍論文）
２．論文標題 北琉球奄美喜界島方言における動詞のアクセント単位の拡張と真偽疑問文末のプロソディー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 プロソディー研究の新展開	６．最初と最後の頁 214-235
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 白田理人	４．巻 42
２．論文標題 奄美大島今里方言の埋め込み疑問文について	５．発行年 2020年
３．雑誌名 南島文化	６．最初と最後の頁 153-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 白田理人
２．発表標題 北琉球奄美喜界島北部方言の確認要求表現―「見ろ」由来の形式を中心に―
３．学会等名 第71回西日本国語国文学会オンライン大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 白田理人
２．発表標題 喜界島方言における動詞のアクセント単位の拡張と真偽疑問文末のプロソディー
３．学会等名 日本言語学会第161回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 白田理人
２．発表標題 北琉球奄美喜界島小野津方言の疑問文末標識と言語行為―話し手の行為遂行に関する疑問文を中心に―
３．学会等名 日本言語学会第159回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関